

近代日本における道德教育

— 新渡戸稲造の場合 —

森 上 優 子

本発表では、近代日本におけるキリスト者新渡戸稲造(一八六二—一九三三)の教育者としての活動に着目し、特に、大衆に向けた「社会教育」の意義について考察したいと思う。

新渡戸は、明治末期から大正期にかけて教育活動を積極的に展開している。彼は、一九〇六(明治三十九)年に第一高等学校長に就任する。一九一三(大正二)年には第一高等学校を退任するものの、一九一八(大正七)年には、東京女子大学初代学長に就任するなど、日本の最高学府を中心とする教育機関において学校教育活動を積極的に行っている。第一高等学校では「倫理」の教鞭をとるなど、青年たちの人格形成に尽力した。さらに、学校教育活動と並行して、新渡戸は雑誌『実業之日本』を主として修養論を執筆している。

『実業之日本』は、一八九七(明治三十)年に創刊された経済雑誌である。当時、日本では資本主義が浸透し、立身出世してお金を儲けることに人々の関心が高まっており、それが生きる目的のひとつと化していた。『実業之日本』も他の雑誌と同様に、「成功」の秘訣や「成功」者の苦心譚などの記事を掲載した。しかし、実業之日本社社長の増田義一は、「成功」を「自己の個性を完成し、模範的人物となって人に感化を与える」(『実業之日本社百年史』)ことであるとし、掲載する記事における修養論の充実を図った。この面は『実業之日本』の独自性

と言えるだろう。

新渡戸は増田に懇願され、一九〇九(明治四十二)年に、実業之日本社の編集顧問に就任し、『実業之日本』にほぼ毎号修養論の記事を掲載していった。新渡戸は人格形成が家庭教育や学校教育だけではなく、雑誌というメディアによる「社会教育」も担うべきことを認識し、階層を超えた国民の教化に取り組んだと言えるだろう。

新渡戸は、「余は何故実業之日本社の編集顧問となりたるか」(『実業之日本』一九〇九年一月一日号)のなかで、「逆境に苦しんで居り、微力ながら僕の如きものに頼りて何とか運命を發展したいと望で居るもの」、「煩悶して居る人」に「慰安を与へたい」と語っている。彼が平易な文章で読者に語りかける方法を探ったのは、自身が青年期に煩悶状態に陥り、書物により救われたという体験があるからではないだろうか。彼の場合、それはカーライルのサーター・リザータスであった。新渡戸は、それを三十回以上も繰り返して読み、後には、それに関する講義まで行っている。この出会った良き書物が、新渡戸の精神的糧となり、その体験が、修養論の執筆へと彼を掻き立てたと推測される。

新渡戸の修養論の特徴についてみてみよう。彼は、物質的な豊かさの追求を人生の目的とすることに消極的な態度を示している。その背景には、物質的な豊かさを追うことは、他者との競争を引き起こし、実力主義の社会を生み出すことになるという考えがあったと思われる。彼は互いの人格を尊重し、他者と共存する社会を目指した。だからこそ、修養論の中心的論点と

して、人間が生きる基盤に「宗教」を置き、その力を支柱とした「心」を人間の行動の起点とし強調したのである。ここに当時の日本社会への新渡戸の批判の目を見いだすことができるのである。

河野省三の神道観

—— 神道教育に関する理論を中心に ——

中道 豪 一

本発表は、大正から昭和にかけて活躍した神職・神道学者、河野省三(明治一五―昭和三八)の神道観に考察を加えたものである。特に神道教育に関する理論を抽出し検討を加えた点の特徴といえる。

発表者は「河野省三の神道教育」(『神道宗教』第二一九号、平成二二)で河野省三の神道教育に関する論考を発表した。そこで論及したのは、河野自身の神道観に基づく教育活動であった。特に伝統的な復古神道観を継承しながら、實際生活に関わる提言をなした点は見逃し難く、日本心(やまとごころ)の主張は、現代の神道教育においても刮目すべき点が多い。よって本発表は、そうした成果を踏まえ、河野の神道観を、神道教育に関する理論―日本心と、その展開の諸相―を中心に指摘し、考察を加えた。

河野は、大正四年に石川岩吉の後任として国学院大学講師に就任、その後は教務課長、教授を歴任し、昭和一〇年には同大

学出身者初の学長に就任した。戦前の研究から昭和二三年に公職不適格とされるも、同二六年には解除される経歴をもつ。昭和二七年には埼玉県神社庁長を務め、三六年には紫綬褒章を受けるなど社会的功績は刮目すべきものがある。

そうした活動を考える際に重要な要素が、生家の生活環境である。河野は、明治一五年八月一〇日、埼玉県北埼玉郡騎西町に鎮座する玉敷神社の神職河野祿郎の次男として生を受ける。玉敷神社は埼玉県北部随一の古社(式内社)であり、江戸時代には久伊豆大明神と称され、勝西領の総鎮守として崇敬を受けた歴史を持つ。河野は明治三八(二四歳)に社司を拝命し、私立埼玉中学校勤務時代、国学院大学勤務時代も神職としての神明奉仕を継続していることから、こうした環境が河野の言動に及ぼした影響は見逃し難い。『神道と国民生活』(神祇院教務局指導課、昭和一七)で述べている「所謂神の道が人間生活を離れた抽象的な或は一方に偏った職業的なものとして思われ、又考えられた結果として、神道が国民生活から遊離してしまつた。私共はこの国民生活から離れて遊んで居る神道を根本の所に立戻さなければならぬ」といった問題意識も、日々の奉仕によつて育まれたと考えられ、「日本心」等の主張も、生活体験が学問研究によつて、発展した産物と指摘できる。

河野は神道を様々な用語で定義するが、「日本民族の伝統的信念及び情操」という定義に基づき理解を進めると、その主張を立体的に理解することができる。河野は神道の分析を、学術的考察から導かれる民族性、情緒的考察から導かれる日本心に分けて行っている。学術的考察結果が、民族性・伝統的信念で